

「第 34 回住まいのリフォームコンクール」総評

住まいのリフォームコンクールも振り返れば歴史は長く、今年で 34 回目を迎えた。応募要項や審査方針は概ね前回通りであるが、ビジネスモデル部門の応募条件には「空き家を活用し、住宅以外の用途へのコンバージョンにより地域活性化に貢献しているもの」が、今回から新たに加えられた。

応募状況は、残念ながらここ数年に亘って漸減傾向が続いており、作品部門の応募件数は前年比で約 14%、応募者数では約 10%の減少となった。工事費の傾向には顕著な動きはないが、入賞作品の中には、リフォーム範囲を必要最小限に抑えて費用を抑えた例が見られた。金額の大きいリフォームもさることながら、工事費を抑えた作品にも、リフォーム前と比較すると居住性や使い勝手が見違えるほど改善され、住人の満足度が極めて高い例がある。リフォームの規模については、予算に応じて可能な範囲で徐々に改善して行く計画も現実的だが、その場合も無計画な「つぎはぎ」のリフォームにならないためには、同じ担当業者が末永く面倒を見る体制が社会に定着する等の条件が前提となろう。

入賞作品を構造種別で見ると、殆どが在来木造と RC 造であり、唯一の例外は鉄骨造の倉庫を住宅に改造した例であった。リフォームに際して何かとハードルの高いツーバイフォーおよびプレファブ構法を対象とした例は、今回も一定数の応募があったものの、入賞作品には含まれていない。今後ともいろいろな構法での応募があることを期待したい。

なお例年、5つの特別賞以外にも優れた作品がある場合は「分野別特別賞」を授与しているが、今回は残念ながら該当作品は無かった。アイデアの斬新さ、困難な条件の克服、デザインや構法・施工方法のユニークな工夫など、既成概念にとらわれないリフォームがさらに試みられて良いのではないだろうか。

ビジネスモデル部門については、ある種「種切れ」の様相を呈している。作品部門ではリフォーム後が住宅であることが条件になっているが、上記のとおり今回からビジネスモデル部門では、リフォーム後が非住宅でも良いという条件を加えることで、より広汎な応募を期待した。しかし応募数は前回の7件からさらに減って5件に、また入賞数も前回の3件から1件に減った。作品部門とは異なって、毎年のように新しいモデルを提案する訳には行かないと言う面もあり、この部門のあり方については更なる工夫が必要な時期かもしれない。ただし応募数が少なかったとは言え、今回も入賞に値する内容の応募はあった。今後とも斬新なアイデアと実践に基づくビジネスモデルの応募に期待するところである。一見平凡そうな取り組みであってもビジネスとしての成立を追求している等のユニークな内容が望まれる。

ところで、この総評では毎回のように応募シートの表現に触れているが、応募内容が十分にアピールできていないものが未だに多い。作品部門の書類審査は A3 判の応募シート1枚で行われるという点を十分考慮し、要点を的確にアピールできるような応募内容をさらに工夫してほしい。

人口の減少や建物の高性能化・長寿命化など、住宅産業をとりまく環境は大きく変わろうとしているが、こういう状況であるからこそ、リフォームの役割は今後ともますます重要になると思われる。このコンクールがそれに役立って行くためにも、関係諸氏のご尽力を今後ともお願いする次第である。

第 34 回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長 真鍋恒博